

女子教育に関する一つの考察（第一報）

—平安朝の文学作品にあらわれた貴族の女子教育—

岡　　　　子[※]

A Study on the Education of Women
Appeared in the Literature of the Heian
Era—Female Education of the Nobility
(The 1st Section)

Yasuko Oka

はじめに

教育の目標、動機は時代により、また男女によって異なり、女子教育についてみると、明治以前、そのための特定の場としてはみるべきものは少ない。しかし、古代より時代に則し、生活を中心とした教育がいろいろの場で、いろいろの方法で行なわれてきたと考える。過去の各時代において、いかなる人間の理想像が描かれまた、その人間像の実現を目ざして、いかなる教育的努力がなされたかについて、特に女子のそれについて研究をすすめる計画である。今回は才媛の輩出が著しく、華やかな文化の開花をみた平安時代における、貴族の女子教育について文芸作品を中心に考察したい。芸術作品とくに、文芸作品はよく時代を反映し、時代の精神的な動きに対して敏感であると考えらるゆえである。平安貴族女性の教育の理想と態度は、やがて、武家に社会的実権が把握されたのちは、あらゆる階層の娘の教養としつけの典型として倣わせ、さらに現代女子教育の基盤をもなしていると思うのである。長田 新博士は日本教育史の冠頭において「現代の教育は過去の教育を基盤とし、その最先端に当たるゆえにわが国古来の教育を明らかにすることは、今日の教育を正しく理解する前提になるであろう。同時にそれは将来の教育の在り方についての方策を生み出す鍵になる」と述べておられる。

1. 古代貴族の教育

飛鳥・奈良時代は日本教育史時代区分の上で第一次文化輸入の時代、平安時代は第一次文化同化の時代といえる。すなわち日本文化の特性は外来文化を輸入し、消化、集大成しつつ創造性を発揮したところにみられる。

紀元701年制定された大宝律令における学令の成文化はわが国最初のものであり、世界における教育法典の中でもきわめて古いものの一つである。その教育機関としては中央に大学寮、地方に国学および種々の専門教育機関をおき、大学寮、国学は官僚養成のための機関で、学科は経学を本とし、学術百般の自由な研究の場ではなかった。しかも大化改新の精神に反して入学資格を官位によって制限するという矛盾した制度であったらう。藤原氏が権力を独占した後には困難な大学寮の学業を修め、官吏登用試験に合格しても下級貴族など容易に任官することはできなかつた。一方、五位以上の貴族の子弟は20才になれば家柄相当の官位に就く「蔭位の制」が存在したため、大学寮に入学して困難な学問をすることを好まず、上級貴族は同族出身の官吏の増加と、その勢力の拡大を目的に各氏族で私学⁽¹⁾を設立したが、そこで官吏登用試験に应付するための学問を修めることを願った。官学、私学何れも男子の教育のみで女子の入学は許されなかつた。平安期における今一つの貴族教育の場は

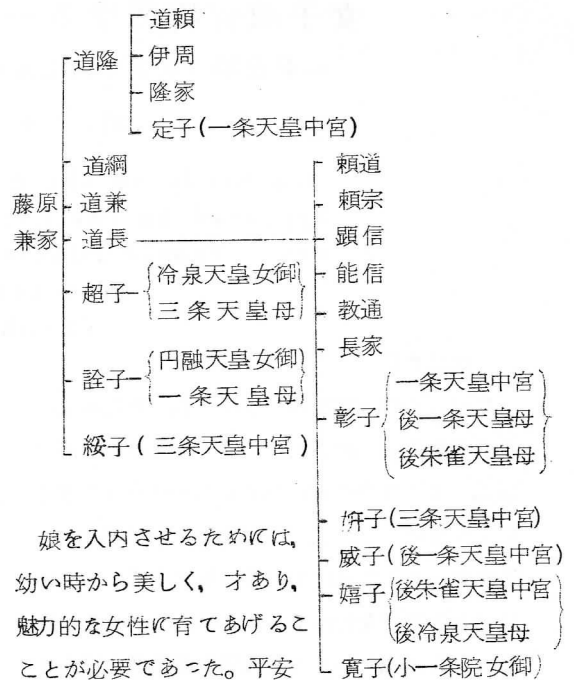
※家庭科教育法研究室

家庭における個人教育であって、ここでは男子とともに女子の教育にも意が用いられた。宮廷および高級貴族の男子は5.6才になれば読書始の儀式を家庭で行ない(光源氏は7才で行なっている)、その後一定の師匠を招き、官吏養成を目的とした教育課程を定め経読して教育したが、女子にはこの儀式を行なわないまま⁽²⁾幼児より教育がはじめられたのである。

第1次文化の同化時代とはいえ平安初期にはなお漢文学が盛んで少年少女も漢詩文を学ぶ者のあつたことは、経国集、続日本後紀などに16、7才男女の詩文がみえることから察せられるが、894年遣唐使の廃止により漢文学は衰えはじめ、わが国土と民族性に根ざした文化の国風化が盛んになるとともに、文学史上空前絶後ともいえるほどに多数の有名女流文学者の輩出をみるにいたつた。その要因はなんであつたであろうか。

2. 平安期における貴族女性の生活と教育

紀元857年藤原良房は人臣として最初の太政大臣、さらに翌年皇族外でははじめて摂政となり、その子基経は遂に関白にすすみ、ここに藤原摂関家の基盤を築き、その高位高官ともなり巨大な富を擁して栄華専横をほしひまにしましたが、その摂関家の地位を確保しさらに拡大するため、かつて不平等が娘光明子を聖武天皇の皇后とし、その子を天皇の位につけて外戚の權威を振つた如く、藤原一門は競つてその娘を入内させ、天皇、皇太子の後妃とし、その子を天皇の位につけ自らは摂政、関白となることを無上の願望としたのである。その一例を次に示す。



娘を入内させるためには、幼い時から美しく、才あり、魅力的な女性に育てあげることが必要であつた。平安

貴族の女性は少女期に入れば男子はたとえ兄弟でさえも隔離し、寝殿づくりの邸の奥深く閉じこもつた生活を強いられたので、そこで父母、乳母や才学ある女性の家庭教師から教育をうけたと考えられる。

当時の天皇の^{きさき}后には皇后、中宮、女御、更衣など10人ほどが数えられたので、その中の1人として後宮に入れば互の権力争いははげしく、その中で自己の優位を保つためには入内するに当り、才学ある侍女を選んで宮仕えさせる必要もあつた。また他の貴人の妻も才ある女性を侍女として雇い入れることが多かつたが、この求められた才女たちはいかなる立場の女性であつたのであろうか。

藤原氏が政権を独占してからは、官職は世襲となり、よほど権力ある門地の出身者でなければ有力な地位につくことは困難で、まして中流以下の貴族は地方官として都を離れて受領となり、財力は獲得できても、なほ彼等のあこがれは中央貴族とし

ての官位につくことであった。娘が宮廷貴族の目にとまり宮仕えすることは女性自身官位につける唯一の道であるばかりでなく、身分社会における一門一族の栄達につながる最善の道であって、受領たちはその機会を強く願った。

そのためこの時代には中流以下の貴族の娘たちも幼い時から教養をつみ、才をみがくことにつとめ、清少納言、紫式部、和泉式部、道綱の母等々の才女を生んだのである。

一方、奈良時代から平安期にかけて、社会的広い場で徐々に形成された万葉仮名の草体化による「平仮名」と、僧侶を中心に創作された楷書体漢字の字画をとった「かた仮名」とは女性の学問を容易にしたのである。優雅な平安朝の恋愛に欠かせぬ和歌をはじめ文学作品は、仮名文字によってはじめて純粹で微妙な感情を表現でき、日本語の日本語的特性の表現も可能であらう。源氏物語「梅枝」の巻に当時の平仮名の全盛を述べているが、池田亀鑑氏も説いている如く「土佐日記」はやがて女流作家により仮名文学としての物語、隨筆、日記、和歌など世界に誇る多くの作品を導き出す先駆となったのである。源氏物語は当時の宮廷周辺的人物、風俗やその間の心理をあますところなくとらえた作品であるが、これら当代の国文学が教育的に意義のあるのは、人間形成的意義をもっていることで、この点から今回はこれら文学作品を中心に女子教育を考察することとしたのである。

貴族による王朝文化が華麗をきわめた平安期の雰囲気は非常に女性的であり、女性の存在価値は大きいはずであるが、現実の生活で多くの女性は自由を拘束され、忍従を強いられたと考えるのである。「空穂物語」に「よき女といえど一人あるは、悪しき二人三人に劣りたるものなれば、我も我もと、男一人に女二人三人付きてなむ

ある」と述べている如く、男は多くの女を相手にすることを男異利とし、本妻すら二人以上もって通う⁽³⁾ことを通常のことと考えた。

「枕草子」に「また家のうちなる男君の来ずなりぬる。いとすさまじ」また、「心みじかく、人忘れがちなる婿の、つねに夜離れする」

「かならず来なんと思ふ人を、夜一夜起きあかし待ちて、暁かたけうち忘れて寝入りけるに云々」など男の多情について数多く述べている。

藤原兼家も5人の妻をもち、その1人道綱母は才色兼備の女性で、彼女の父藤原倫寧は娘の結婚によって得たと考えられる、陸奥の国司という栄転の旅に出發するに当り、「きみをのみたのむたびなるころにはゆくすゑとをくおもほゆるかな」と娘を兼家に托したのであるが、父の願いも空しく一夫多妻による女の苦しみ、もだえを経た結果その生活を「蜻蛉日記」に書いたのである。

3. 女子教育の理想

平安京の地は要害の備えに適したのみならず山水の美に富み、平安時代の優雅な世相はこの山水美の天地にはぐくまれていったと考えられる。貴族の多くは豊かな経済力と閑暇をもって安逸に流れ、日日の生活は優美そのものであったことは「源氏物語繪巻」「枕草子繪巻」⁽⁴⁾などによってよく知られていることである。

かかる自然的、人的条件の中で貴族の女子教育はいかなる理想のもとに行なわれたのであらうか、この点を考察したい。

古代、中世の女子教育について石川謙博士は次のように述べている。⁽⁵⁾「將に結婚すべくして未だ結婚せざる青年期女子のあるべき姿を教え授けることを主眼とした。従って行儀・作法・心の持ちよう・嗜みとしての諸芸、諸技と共に、美容法、表情法をも併せ教えるのが常であ

った。」と。すなわち教育の理想として考えられることは、(1) 容姿美しきこと、(2) 服装の美しきこと、(3) 心ばえ美しきこと、(4) 学芸に秀でることなどであったといえる。

(1) 容姿美しきこと。

男性も美しい容姿であることに努めたが、まして女性の理想の第一は姿貌の美しさに優ることであつて、当時の文学作品は女性の美しさを形容するに、まず豊かな、艶けき髪について述べているものが多い。「紫式部日記」に「大納言の君は(中略)つぶつぶとこえたるが、うわべはいとそびやかに、髪、たけに三寸ばかりあまりたる(中略)すべて似るものなくこまやかにうつくしき。」と。「空穂物語」には「……女御君かんのおとら、かいわけつづけづりたまふ。いと多くうつくしげにて、八しやくばかりあり」と、身の丈より余程長いものとみえる。「栄花物語」「はつはな」の巻に、道長の娘妍子について「十四、五ばかり(の)おはしまして、いみじううつくしげにしつらひ据へ奉らせ給へり。色々の御衣どもをぞ奉りて居させ給へる。御髪の紅梅の織もの、御衣の裾(の)かゝらせ給へる程、(中略)御丈には七、八寸ばかり餘らせ給へるらんかしと見えさせ給。」と。「源氏物語」「末摘花」に「かしらつき髪のかゝりしもうつくしげにて、(中略)うちきのすそをたまりてひかれたるほど尺ばかりあまりたらんとみゆ」とある。髪が長く、きよらかで、太り気味で色白いことを若い女性の美の条件としたことが推察できる。そのため髪が長くない時は「つくろいたるわざして」すなわち添え毛をして「官にはまゐる」とも述べている。(源氏物語)美しく髪を伸すためには幼時から種々の注意がはらわれ、そのための行事の一つが「髪曾木」(髪そぎ)の行事である。

女子は4才ぐらいで行なうのが通例で、時期は二月、四月、十一月の吉日を選ぶことが多かった。当日の行事としては子供を碁盤の上に立たせ、吉方に向はせて、賀茂川の石を取り之を両手に握らせ、また、両足にも踏ませた上、髪を左右に振り分けてその末端を剃ぎ、その髪は河中に投げこむことを作法としたのである。⁽⁶⁾「源氏物語」「葵」の巻に、賀茂の祭の日に光源氏は紫の上の髪そぎをなし、「千尋」と唱え、祈念したとある。髪的美しさを保つには、日に幾度となく櫛けづり、油⁽⁷⁾をつけた。以上は主として上流貴族の女性について述べたもので、同じ女性でも社会的立場により異なっていたことは多くの資料にみえている。次に顔について「源氏物語」「空蟬」の巻で光源氏は、伊豫介の娘軒端の萩を眺め、「たいそり色白で、円々と肥えて背が高く、頭つき額つきの水際だった、眼もと口もとに愛嬌があり、花やかな顔だちをしていて美しい」と賞している。愛嬌がある口もととは尋常でやや小さく、眼もとに愛嬌があるとは当代の絵巻物にも見られる如く紙く切れ長で、垂れ目をいうものと考えられる。鼻については「身のかたみ」⁽⁸⁾に、「御はなは、顔のうちにて、とりわきめにたつものにて候、けしやうのうちにて、御心をそへられ候へ、こくしろくあそばされ候な、よのところよりはちと薄く御けはひ候べく候」とあり、鼻は高すぎず、目だたぬ方がよいとされたのであらう。化粧は男女ともに重要視したものの如く「源氏物語」「常夏」の巻で、近江の君を評して、軽薄な声で話すことは下品で教養がなく、化粧がへたであると評している。白粉としては米粉などの澱粉質も用られた⁽⁹⁾と思われるが、貴賤男女の別なく化粧したことが伺える。「枕草子」「白馬を見る」条に、「とねりが貌のきぬもあ

らわれ、しろきものゆきつかぬところは、まことにくろき庭に、雪のむら消たる心ちして、いと見ぐるし」と述べていることから舎人ですら白粉をつけたと思われる⁽¹⁰⁾ 紅粉は、紅草から製し、この時代には唇ばかりでなく、おもに頬に塗ったとみられる。黒⁽¹¹⁾ は、古代から女子にのみ行なわれ、当代も盛んであった。「枕草子」に「心ゆくもの、はぐるめのよくつきたる」また、「紫式部日記」に「つごもりの夜、追儺はいと疾くはてぬれば、はぐるめなど、はかなきつくろいもすると云々」とある。眉は生来の眉の不均等、不調和を人工的に補修するため眉毛を抜き、また眉墨で自然の眉の位置を標準として整えたようである。

(2) 服装の美しきこと。

芝葛盛氏の「平安時代の風俗」によれば、奈良時代唐風に倣った服制が、時世の変化と思想の推移などにより、国風化を示すようになってきたと説いている。平安時代の婦人の礼装には二種ある。① 晴装束、② 正装であるが、晴装束は次のように着装する。緋の袴、単、桂（後世は五衣）、打衣、表着最後に唐衣を着用し表着と唐衣の間に裳をつける。正装は、晴装束の上に衽礼・裙帯を装い、額という金属の鐙を戴き、釵子をさすのであって、朝廷の公事の場合などに用いる。女官の十二単は種々の説があるが「源平盛衰記」によれば、当代女子の盛装であり、単を十二もそれ以上も著たので十二の御衣といい、「源氏物語」にみる如く、「御衣ばかりに見えさせたまふ」様子が想像できるのである。労働を極度に卑しいことに思った当代の貴族としては、服装の機能性など問題でなくただ優美さのみ求めたと考えられるのである。しかし日常の出務や家庭における服装は簡略化されたものが用いられたが、袴は必ず着用した

と、藤木邦彦氏は説いている。（平安時代の貴族の生活）要するに、平安時代の女性は姿貌のみでなく化粧、動作、表情、態度など凡ての美しさのための教育と注意が幼時より行なわれたと考えられる。

(3) 心ばえ美しきこと。

平安女性の精神的な面の教育について考察したい。「源氏物語」「玉鬘」の巻に「女はとりたてて或る一つのこと凝るといのは見よいものではなく、そりかといつてよろずのこと心得がないのも口惜しい、只胸のうちにしつかりとしたものもち、うわべは優しい一方なのがのぞましい」と光源氏は語っている。同「権」の巻で源氏が愛情を寄せた藤壺について「いつも慎み深く、なかなか行きどいておられる。もの柔かて深い思慮がおありになる方であった」と女子はひかえめで、男性に依存的であることがのぞましいと考えられたのであらう。

光源氏と桃園式部卿官の齊宮との間の噂や源氏のそぶりに心を痛め、口に出して恨みは云わなくても、機嫌の悪い紫の上に「気を廻しすぎて、かどかどしい点があるのが瑾だ」とさとし、また、「藤袴」の巻では「女は三に從ふものにこそあなれど云々」と三從の道を教えている。結婚後の男女関係は、男性上位であったと考えられる。「簞木」の巻のいわゆる「雨の夜の品定め」において光源氏、頭中将、左馬頭など4人の若き貴族が自己の経験を通して、女性の人柄を四つのタイプに分けて品定めしていることは人のよく知るところである。これらのことから著者紫式部は源氏物語の中に数多くの女性を登場させているが、「高貴の家庭に生い育ち、十分な教導を受けた好ましい女性が多いが、円満具足の理想的な女性が少ない」と訴えているのであらうと考えるのである。

女子教訓書とせられた「めのとさうし」「乳母のふみ」「身のかたみ」など(多少の時代のづれはあれど)の中から、家庭におけるしつけを考えてみる。「乳母のふみ」に「たとへひとのいみじうつらき御事候とも、いろに出入に見えんは、はづかしかりぬべきこととおぼしめして、さらぬかほにてはありながら云々」。また「うれしう御心にあふ事候とも、こと葉に、うれしやありがたやなど、おほせごとあるまじく候」。「めのとさうし」に「御むすめそだち候こと、十ばかりにもなり候はば、おくふかく、人にみせられ候まじ、心もちうらやかに、こゑひきく、御そだて候へ、(中略)はしちかにうちふしなど、させらるまじく候」、(中略)「御身より下にさぶらふ人などには、御なさげかけられ候へ、(中略)さればとていやしきものにちかづきて、うちなづき候を、よき事はぬもの也云々」「人のことのね、笛のねなどきこしめして、いかに御きしり候とも、(中略)しろしめししらぬかほぞよき」。あくまで品よくつつましく、貴族の誇りを身につけることを必要としているのである。

(4) 学芸に秀でること。

「大鏡」頼忠伝にみえる、男性の「三船の才」^{ざえ}にも似て、女性にのぞまれた学芸も、書道、和歌、音楽などで、「枕草子」に村上天皇の御時、宣耀院の女御がまだ御娘でいられるとき、父大臣が「ひとつには御手を習ひ、つきにはきんの御琴を人よりことにひきまさらんとおほせ。さては古今の歌二十巻をみなうかべさせ給ふを御学問にせさせ給へ」となん聞先給ひける。村上天皇は、ある時古今集の歌について一夜中、草子を手にしてお尋ねにられたのに女御の答えには一点の誤りもなかったと、並居る人々が感心したと述べている。また「枕草子」「うらや

ましげなるもの」に「よき人の御前に女房あまたさぶらふに、心にくき所へつかはず仰せ書などを、誰もいと鳥の跡にしもなどかはあらむ」と女房たちの文字がじょうずであったことを述べている。「源氏物語」「桐壺」の巻で「琴なども格別な音かきならし給ひ」と源氏はその母を讃え、また、「初音」の巻で、源氏は若紫に琴を教え、玉鬘にも稽古することをすすめている。

平安貴族の男女の恋愛・婚姻は和歌の贈答ではじまり、それによって相手の心を伺い人柄を推察したが、当代の婚期の熟することは殊のほか早く、男は1 1.2歳～1 4.5歳で、女は9歳～1 1.2歳で結婚するものがあった¹²⁾とすれば和歌、書道を幼い時から教養、学問として精進したことは当然と考えられるのである。

音楽は、洋の東西を問わず男女とも教養として欠くことのできないものとしたことは衆知の通りである。その他「源氏物語」「絵合」の巻で、権中納言が娘に絵を教えることに熱を入れた様子を述べている。裁縫も女子に必要な技としたことは「枕草子」「紫式部日記」「蜻蛉日記」などに多くみられることである。

4. 女子教育の内容

次に女子教育の理想を実現するための教育内容について考察することとする。

平安初期は、奈良時代のあとをうけて総じて唐文化の影響をうけ、晩唐文物の反映がみられた。すなわち、教育、風俗その他唐風が中心であったが¹³⁾世人はようやくこれに満足せず、さまざま独創立案をなし、唐風の弊害を除去しようとして企てるに至った。また、平安期には教科書の使用も多くなり、中国編纂のもののほか日本人が編纂したものとして「和漢朗詠集」などが用いられ、女子用としては、「和名抄、三宝絵詞」などがあつた。

紫式部は歌人の一門に生をうけ、父為時が兄惟規に漢籍を指導する傍でこれを読み、兄よりさとく解読したので、父をして「口惜しう。男子にてもたらぬこそ、さいわひなかりけれ」と嘆かせたと伝えられる。道長に願望されて、一条天皇の中宮彰子に宮仕えし、「白氏文集」を進講したと紫式部日記に述べているが「源氏物語」によっても紫式部の漢詩文の教養の深さが理解できるのである。清少納言は和歌の達人清原元輔を父とし、彼女自身中古三十六人歌仙依に選ばれたほどであるが、さらに漢学に対しても豊かな教養をもっていたことは「枕草子」の「少納言よ、香炉峯の雪いかならん云々」という一節でよく知られていることである。その時傍にいた女房たちも「さることは知り、歌などにさえ歌へど、思ひこそよらざりつれ」といっていることから他の女房たちも「白氏文集」など学習していたと考えられる。「源氏物語」「橋姫」の巻に「八宮は、この君たちを（中略）琴習はし、碁うち、偏つぎなどはかなき御遊びわざにつけても云々」と。「枕草子」に「長押の下に人近く取り寄せて、さしつどひて偏をぞつぐ云々」。「栄花物語」に「御前に召して、碁双六打たせ、偏をぞつがせ、石などりをせさせて云々」とある。すなわち漢字の傍だけを示し、その偏を継がせる遊戯を通して漢字を覚えさせたと考えられる。しかし女子の学問の第一は女文字とした仮名文字の手習いであったことは、「紫式部日記」にも、「なで女女の真名書を読む、昔は経読むだけに人は制しき、としりうごちいふを聞き待る」と、漢字漢文を読み書きする女、人前で経を読む女は批難されたと書いていることから考えられる。平安後期の作「堤中納言物語」「虫めづる姫君」に「…仮名はまだ書き給はざりければ

、片かんなに云々」とあることから手習いの初歩は片仮名からで、家庭では男女ともに、5,6才になれば、まず片仮名を学ばせ、次に男子は漢字に移り、女子は平仮名の読み書きを学ぶことを通常としたが、このことから男女の教育目標の異なることが考えられるのである。読書兼手習いの手本としたのは、「難波津の歌」「浅香山の歌」「あめつちの詞」「いろは歌」であった。「あめつちの詞」は「空穂物語」「源順集」「相模集」等にみられる。内容は、あめ(天)つち(土)ほし(星)そら(空)やま(山)かは(川)みね(峯)たに(谷)くも(雲)きり(霧)むろ(室)こけ(苔)ひと(人)いぬ(犬)うへ(上)すゑ(末)ゆわ(硫黄)さる(猿)おふせよ(生育せよ)えのえを(榎木)なれもて(馴れていて)など。「難波津の歌」とは「なになにわづに咲くやこの花冬ごもり、今を春べと咲くやこの花」、「浅香山の歌」は「あさか山かげさへ見ゆる山の井の、あさくは人のおもふものは」でいづれも古今和歌集に見られ、「二つの歌は歌の父母にして、手習ふ人のはじめにもしける」と説明している。「いろは歌」はその作がほぼ天禄・永観の頃、十世紀の終り頃と思われる、と辻善之助氏は説明している。(日本文学史巻二)従って上記の歌について「いろは歌」も読み書きの手本となり、今日に至っているといえると考えられる。和歌について、恋愛や結婚相手の教養、人柄を推察し、自分の感情を相手に伝えるには文や和歌をおくることが唯一の方法であり、他面当時室内娯楽の一つとして盛んであった歌合わせの会に参加することは一つの格式をあらわすものであってそれらのためにも、男女とも幼い時から書くこととともに歌を詠むことを学芸の中心

とした。しかし当時の貴族女性の生活態度は必然的に視野が狭められ、その歌は故事、古歌にとらわれ易く、思想も固定化、形式化して、技巧を主としたといえるのである。これらの点からも真の人間教育は、広く豊かな生活経験に根ざし、生々とした直観の裏付けがいかに必要であるかを考えさせられるのである。

音楽について、すべてに優美さを第一とした貴族は遊興のつどいに音楽を奏し、宴を開いては音楽と、音楽は生活、行事と離れぬものであった。清少納言は「弾きものは琵琶、さうのこと」といっているが、当時の楽器には琴（七絃）箏（十三絃）和琴（五絃）琵琶、横笛、笙、尺八、鐘、太鼓などがあつた。「乙女」の巻で光源氏は、和琴の音の美しさを讃えている。わが国中世、近世においても琴、三味線などの芸能を女子に必須としたことはよく知られるところであるがこの時代の様を倣ったものと考えられる。舞踊について、桜井秀博士著「風俗史の研究」によれば、当時雅楽でさえも楽人の独占でなく、中流階級の子弟も実技についての教養を有したと述べておられる。唐風を模倣した女踏歌は、^{舞れり}宮廷の一儀式として毎年正月14日または16日になされた。五節舞は新嘗祭、大嘗祭に清凉殿において天子の御前で行なわれた少女舞で、女性にとってこの上もない晴れの場であった。そのため莫大な経費を支出しても貴族は競って子女を差出したいとしたが、これらの舞は身のこなしを美しく、音楽とともに気品を高める上から女子の教育上重んぜられたのである。絵画について、文化の国風化と共に倭絵、仏画等の絵画の隆盛をみたが、「源氏物語」では、光源氏の手で育てられた若紫は父と共に楽しそうに絵を描き、明石の上の姫君も母が描いてくれた絵物語を手本に習っている。後、この姫

が入内するとき源氏は手本として名画の数々を贈っている。絵合わせの遊戯は幼い頃から上品な遊びとして行なわれた。

裁縫も女性の教養として、母からおもに指導され、生活上必要なものの「織り、染め、裁ち縫うわざもすぐれていることがよい」と篤木の巻で説いている。「落窪物語」でも落窪の君に対し継母が裁縫を教えている。「枕草子」「ねたきもの」に「裁縫の失敗を残念がっている」ことから日頃彼女らも針を持ったと考えられる。「蜻蛉日記」の作者も母に教えられた技で急ぎの衣類を仕立てたことを述べている。一針一針縫いあげた衣がわが子わが夫の肌にふれるとき、時間と労力を超越して人間的暖かさの交流をみたのではないであらうか。

5. 仏教と女子教育

奈良時代隆盛をみた仏教は、平安期に入りますます盛んとなった。奈良期においては、鎮護国家の思想のもとに、国家的祈禱を多く行なったが、藤原時代に至っては、個人の祈禱、供養を事とし、その傾向は次第に著しくなっていた。事あれば読経・修法・加持祈禱、出産、病気の場合もまず多くの僧侶を迎えて加持祈禱を行なった。平安中期よりは西方極楽往生を説く浄土教がさかえ、その説くところは芸術趣味に富み、温雅な風格を備えて、貴族の信仰は厚く、一種の運命観、宿命観を抱かせるようになった。女性は幼い頃から参会した寺院の仏教行事を通して帰依の心を動かし、仏典を手にして、読経写経にはげむ宗教教育を通しての教養も行なわれた。「今昔物語」に「今昔右大弁藤原佐世ト云フ人有リ、其妻ハ山城守小野高木ト云ケル人ノ娘也、其女幼キ時ヨリ因果ヲ知り、仏法ヲ信ジテ道心アリ」「十二歳ニ成ルニ遂ニ法花経一部ヲ習ヒ畢ヌ。云々」とある。他にもこの

種の傾向を示す例は多い。桜井秀博士著「風俗史の研究」には当代少年少女の教育課程の年齢別のあり方を述べておられる。(男児省略)

- 女兒 7歳 姫君心経及び真言少々ヲ習フ。
「玉葉治承四年十一月七日程」
9歳 大乘経若干卷ヲ読ム。
「元享釈書」卷十八(敦光女)
12歳 姫君観音経等命経竝諸真言ヲ受奉ル「玉葉壽永三年正月二十七日条」

以上は一例であるが、女子教育に仏教が重要な要素となつたと考えられる。しかしその教授法は「創作より模習に長ずるを希り風が強かつた。マナブなる語が模擬(マネブ)より出たらしい事実も此短所を裏づけるものである」と桜井博士は説いている。(風俗史の研究)

根強い社会風習の中で、忍従の生活を強いられた女性は身の宿業を感じ、また、愛欲煩惱の情念の解決を仏教に求め、仏教は教育のみならず精神的よりどころとなつたと考えられる。

6. 女子教育の場と担当者

家庭において、父母をはじめ乳母、師匠から指導をうけたことはすでに述べた。源氏物語で紫の上は幼時から祖母に、夕霧の子は母から、蜻蛉日記で兼家の娘は父からそれぞれ教育されている。宇治十帖で八宮は娘大姫、中姫に細々と訓し教えている。枕草子の中で「子どもが余り親に甘えて人に迷惑をかけ、さしてがましいのは、親や乳母のしつけがよくない故で、幼少の頃から厳しくしつけた方がよい」とくり返し述べている。乳母の存在の重要性は源氏物語の中にも多くみられる。女三の宮の乳母、雲井の雁の乳母、宇治の姫君の乳母など、母親の指導にもまして常に傍にいて、養育につとめ、文遣いから恋愛、結婚まで凡ての指導にあたり教育

上重要な役割を果たしたといえるのである。

女子教育に深い関係をもつ官仕えの教育的意義、諸行事などについては、次の機会にゆづることとしたい。

7 ま と め

平安貴族はその願望達成のため女の子の出生をこよなく喜び、いつくしみ育て、愛情豊かに教育してその美しさと才能をのばすことに努力した結果、偉大な成果を現わし、女性の地位も必ずしも低かつたとはいえないが、一面「ものの教でなかつた」ともいえると思われる。

現存する貴族の家系図に男子は堂々と本名が書き込まれているが、女子は宮廷に入り中宮、女御などになり得た者、長い間官仕えして三位ほどの位にまでなり得た者の場合は本名が記入されているが、その他は「女子」とのみでその傍に結婚相手、官仕え先などが書き添えてあるにすぎない。中宮彰子に仕えた紫式部、和泉式部、赤染衛門、中宮定子に仕えた清少納言などは、各父親の官名などを中心とした呼び名は伝えられていても、その本名、生年、歿年は不明である。家庭にあって官仕えもしなかつた蜻蛉日記の著者は、父や夫、息子の名を手がかりにした呼び名しか残らず、業績を書きあらわしたのものもない。ここに平安女性の華やかさと共に宿命的運命を感じるのである。

平安期の都と地方の文化の格差は大きく、女子教育は都の貴族を中心に行なわれた。しかし当代女子教育の理想と内容、方法は中世における武家および、一般庶民の女子教育に大いなる影響と刺戟を与えていると考えるのである。

註

(1) 平安期に創設された私学

氏族名	私学名	設立年(AD)	経続年数
和家氏	弘文院	782	約100年
菅原・大江氏	文章院	805(ごろ)	// 400年
藤原氏	勸学院	821	// 400年
橘氏	学館院	834~ 847	// 300年
在原氏	奨学院	881	// 300年

(2) 「就学始の史的研究」, 「読書始教授様式

の研究」尾形裕康著による。

(3) 「日本婚姻史」高群逸枝著による。

(4) 源氏物語絵巻は尾州徳川旧侯爵家蔵・など。枕草子、絵巻は益田旧男爵家蔵・原家蔵、浅野旧侯爵家蔵など。『日本風俗史講座』

「平安時代の風俗」芝 葛盛著による。

(5) 「女子用往来物分類目録」石川謙著による。

(6) 『日本歴史新書』「平安時代の貴族の生活」藤木邦彦著による。

(7) 油には水油、固くねったびんつけ油があり、水油は丁字油の如きものに香料が加えられた。

『日本歴史新書』「平安時代の貴族の生活」

藤木邦彦著および註(5)の著書による。

(8) 作者不詳、足利時代の女子教訓書。

(9) 白粉すなわち鉛華は、日本書紀にすでにみ

えているが、多くは中国、朝鮮から輸入した鉛粉を使ったようである。水銀を加熱して作る水銀白粉も使われていた。「日本風俗史」上和歌森太郎著による。

(10) 男の化粧については、「源氏物語」「藤裏葉」「初音」の巻などに夕霧や光源氏が念入り化粧する様子を述べている。

(11) 齒黒ははぐろめ、鉄漿 かねともいい、^ふ倍子に鉄漿を加えてつくる。可婚期を迎えたことをも示すものである。

(12) 「風俗史の研究」桜井秀著によると道長は後一条天皇が11歳で元服せられるや、20

歳の娘威子を中宮にたてたことを述べている。光源氏は12歳で元服し、左大臣の婿君として16歳の葵の上と結ばれた。

(13) 唐風であった例の一つとして、弘仁9年(818)3月の勅に「……卑しき者が貴き者に逢いて、跪くなどのことは、男女を論ぜず総て唐の法による」ことなどが日本紀略その他にみえている。

参考文献

日本教育史 唐沢富太郎著

江戸時代以前の教育(岩波講座)高橋俊乗著

日本風俗史 和歌森太郎著

平安時代の貴族の生活(日本歴史新書)

藤木邦彦著

平安時代の風俗(日本風俗史講座)

芝 葛盛著

風俗史の研究 桜井 秀著

奈良時代の風俗(日本風俗史講座)

江馬 務著

女子教育史 志賀 匡著

日本教育通史 尾形祐康著

日本歴史(上) 井上 清著

日本女性史(上) 井上 清著

日本の女性史(1.上代) 和歌森太郎

{ 山本 藤枝 共著

新日本教育史 加藤仁平 工藤泰正

遠藤泰助 加藤勝也

共著

日本教育史 長田 新著

近世庶民教育史 石川 謙著

源氏物語 谷崎潤一郎訳

源氏物語(日本古典文学大系)

山岸徳平校註

女子用往来物分類目録 石川 謙著

蜻蛉日記
和泉式部日記 } (日本古典文学大系)

鈴木知太郎

川口久雄

遠藤嘉基

西下経一

} 校註

枕草子 } (全 上)
紫式部日記

池田亀鑑 岸上慎二

秋山 虔 校註

竹取物語 (日本古典文学大系) 板倉篤義校註

栄花物語 (全 上) 松村博司 校註
山中 裕

宇津保物語 (全 上) 河野多麻 校註

大鏡新講 橋 純一 著

日本婚姻史 高群逸枝 著

Summary

In the Heian era, the Fujiwara clan kept their dictatorship for a century. During that time in order to secure the regency or the chief advisership to the Emperor, the Fujiwara clan offered their daughters as consorts to nearly all the emperors and the crown princes of that age. For this purpose they educated their daughters to be beautiful and talented and when they enter the imperial court they had to be accompanied as lady's maids by women of wit and beauty.

Since the early part of this period literature and other accomplishments began to assume Japan's own characteristics: kana letters were invented which helped to make women's learning much easier. Thus a number of lady-authors appeared who created as many literary masterpieces. Among female accomplishments there were calligraphy, poetry, music, paintings and sewing. They were taught at home by parents and nurses, often through the domestic, social and Buddhist activities or sometimes in the course of games in poetry or pictures.

The education for women chiefly consisted of cultivating dignity and noble character for their own happy lives. On the other hand, however, their parents were apt to utilize their daughters for their own sake. This trend has influenced and stimulated the education of the daughters of warriors and the general public in the middle ages.

But women's education in this age was solely administered to the daughters of the nobility in the urban area, which enlarged the gap between the urban and the rural people because of the unfavorable, economic and political conditions and traffic and communication inconveniences in the countryside. Dr. Ken Ishikawa said, "Their chief purpose was to help make unmarried, marriageable young girls what they should have been" It seems to us that their aim was to educate girls to be submissive to men and suitable for married life.